

令和4年9月1日

保護者の皆様

昭島市立富士見丘小学校  
校長 稲垣 達也

## 言葉は心の足音 言葉の力を磨く

令和4年度2学期が始まりました。今学期もよろしくお願い申し上げます。

さて、今年も、夏休みの間に、8月6日「広島原爆の日」、9日「長崎原爆の日」、15日「終戦の日」などを迎え、平和の意義を考える機会があったかと思います。しかしながら、この夏は、心を痛める衝撃的なニュースが止まず、大きな無力感に迫られました。

多くの皆様が、新型コロナウイルス感染症に加え、今年2月に始まったロシアによるウクライナ侵攻など、不安が一層高まる中、平穏な生活や、平和を祈る日々を過ごされていたのではないのでしょうか。

「今日も学校に登校できる」「友達に会える」「たくさんのことを学ぶことができる」子供たちは幸せです。

そんな中、**広島**の平和記念式典で**小学6年**の二人が読み上げた「平和への誓い」に、私は、今だからこそ噛み締めた「言葉の力」を強く感じました。

--- (引用始) ---

私たちは、広島の町が大好きです。ゆったりと流れる川、美しい自然。「おかえり」と声をかけてくれる地域の人、どんなときでも前を向いて生きる人々。広島には、私たちの大切なものがあふれています。(中略)

国や文化や歴史、違いはたくさんあるけれど、大切なもの、大切な人を思う気持ちは同じです。みんなの「大切」を守りたい。「ありがとう」や「ごめんね」の言葉で認め合い許し合うこと、寄り添い、助け合うこと、相手を知り、違いを理解しようと努力すること。自分の周りを平和にすることは、私たち子どもにもできることです。

大好きな広島に学ぶ私たちは、互いに思いを伝え合い、相手の立場に立って考えます。意志をもって学び続けます。被爆者の思いに、私たちの思いを重ねて、平和への思いを世界につなげます。 --- (引用終) ---

「**言葉は心の足音**」(龍禅寺元住職の松原泰道老師の言葉)とは、心は姿も形もないので見えないが、言葉のトーンを聞くと、見えないその人の心の動きが確かに聞こえてくる、という意味です。

また、評論家の亀井勝一郎さんは、「**言葉は心の脈拍だ**」といます。医師は脈を診てその人が健康かどうかを知るように、言葉を聞くと、本人の心の健康状態がわかるのです。荒々しい言葉を吐く人の心は必ず荒れている。静かな言葉遣いができる人の心は和やかであると。

広島の子供たちの言葉は、まさに「心の足跡」と言えます。

この他、この夏に出会った二種類の言葉を紹介します。

## その1 「このごろは、ロシア人であるということに苦痛を感じる」

7月5日（火）、現代ロシア文学を代表する作家ミハイル・シーシキン氏の寄稿が、朝日新聞朝刊に掲載されていました。長期化するロシアのウクライナ侵攻を受け、自身の思いを綴ったエッセーです。

---（引用始）---

「このごろは、ロシア人であるということに苦痛を感じる」

「私にできるのは、私の国、国民、言語の名において遂行されているこの犯罪行為について、許しを請うことだけだ。」

「文学とは、戦争に抵抗するものだ。真の文学は常に、人間が憎しみではなく愛を求めていることについて語っている。」

「戦争が置き去りにした人々の中の溝を埋められるのは文化だけだ。憎しみは病気であり、文化がその治療薬なのだ。」

「真の偉大な文学であるならば、これらの本は最後には光や希望、愛に満ちたものになる。真の文学とは残酷さについて語るものではなく、人間らしさをもって残酷さを克服することについて語るものだ。私は信じたい。真の本は、すべて希望や光、人のぬくもりを運ぶためのノアの箱船のようなものなのだ。」 ---（引用終）---

無力感を覚えながらもウクライナ侵攻に心を痛めています。そして、これから向かうべき未来について、文学に携わる者として想いを綴っています。

憎しみではなく、愛を。争いではなく和解を。無力感に負けることなく、粘り強く希望や光、人のぬくもりを運ぶ存在へと成長することを祈っています。

広島の子供たちの言葉と、一つの想いが重なります。

## その2 「遊びまくってコロナにかかるWうけるW」「因果応報、自業自得」

一方で、岸田首相が新型コロナウイルスに感染したというニュースを受けて、日本のツイッターなどのSNS、ネット上に、心無い言葉が多くみられました。

---（引用始）---

「ワクチンの効果無いんやね」「何やってんだお前」「夏休みで遊んでたからじゃね」「夏休みが続いてよかったね」「マジでギャグみたいなヤツだな」 ---（引用終）---

感染したこと自体を責められるべきでしょうか。政治家でも芸能人でも同じです。むしろ、仕事上、行動範囲も広く、感染リスクは高まるかもしれません。

言葉を刃物にしてはいけません。お互いに自分の心の足音を聴いて、思いやりの心を大切にしてほしいと願います。感染した人に向けられるべき言葉は、揶揄や誹謗中傷ではなく、思いやりといたわりの言葉です。また、特定の人に向けられた言葉は、他の多くの人をも傷つけることとなります。感染者は全国で累計2千万人に迫ります。SNS上で無責任な言葉を発している人たちの「心の脈拍」はいかなるものでしょう。

心の足音に耳を澄ましてみよう。どんな足音が聞こえてこえてくるだろう。

しかしながら、上記のSNS上の言葉は、特異な例ではなく、子供たちは（大人も…）、「ヤバイ」「エグイ」などといった“極端な単語”ですべてを表現しようとしています。それは、もはや、言葉を放棄していると思えないのです。言葉の力の脆弱さは、生きる力を妨げていることに気付かなければなりません。

最後に、東洋経済オンライン「なぜ子どもの国語力格差は生まれるのか」という記事を紹介し  
ます。

---（引用始）---

文科省は、国語の力を単なる読解力ではなく、語彙をベースにして情緒力、想像力、論理的思考を駆使して上手に生きていくための生きる力としています。本来、人にとって言葉は、物事を知覚する、想像する、思考する、表現するといったことのベースとなるものです。それを時代に合った形で適切に使用できなければ、生きる上での妨げとなります。

例えば、社会は荒海のようなところでは、国語力はその荒海を渡るために必要な「心の船」です。語彙をベースに情緒力、想像力、論理的思考をフル回転させることで初めて、複雑な社会を生き抜くことができます。（中略）

昔の社会は今ほど複雑ではなく、国語力は自然と身につけるものでした。読書によって語彙・読解力を鍛え、自然の中での遊びを通して情緒力を鍛え、親族や他者と交わる中で常識や想像力を磨く。そして学校で年齢に合った論理的思考の訓練をしました。

今は、それが非常に難しい時代になっています。本を読む機会がほとんどない子や、スマホやゲーム漬けで育てられる子が急増しました。地域間交流が減り、人間関係も限定的…。

---（引用終わり）---

多くに知見を引用させていただきましたが、この夏は、学校教育の在り方について様々考えさせられました。保護者の皆様も、家庭教育を振り返る参考としていただければ幸いです。